

野洲川改修記念公園

マップ参照番号

1

野洲川改修により、旧野洲川南流の笠原橋と県道の間の南流跡地に、多目的広場と野洲川改修記念公園が設置されました。

公園内には昭和 54 年 6 月に通水した野洲川放水路事業記念銘板があります。銘板の表には、事業に至った背景や改修計画、工事の経過等が細かく記載されており、また裏面には昭和 28 年の 13 号台風による災害の被害状況が紹介されています。



野洲川放水路記念事業銘板



野洲川放水路記念事業銘板(裏)

また、この公園の一面に野洲川通水 15 周年記念碑があります。

暫定通水から 15 年が経過し、流域の住民が安心できる川になったことを喜び、「野洲川事業をやって良かった」との思いで平成 7 年 1 月に建立されました。



野洲川通水 15 周年記念碑

野洲川音頭の碑は、通水祝賀会で披露されたもので、野洲川の歴史や流域住民の思いが詠われています。



野洲川音頭の碑

蛭江神社境内

蛭江神社境内は約 4,500 坪の広大な境内に、鳥居と楼門、本殿と仏堂（地蔵院、毘沙門堂）が並び、さらに鳥居の前に観音堂(西源寺)を配置する全国でも珍しい「神仏習合型」を今に伝える神社です。（蛭江神社境内は、昭和 52 年 4 月 30 日、**守山市指定文化財**に指定されている。）



鳥居の向こうに楼門が見える



楼門の奥に拝殿、本殿と続く



一番奥の本殿



境内の地藏院



境内の毘沙門堂



鳥居前の西源寺

地蔵院は、宗祖大師 25 霊場第 8 番札所として多くの参拝者があります。安置されている地蔵菩薩像は、慈摂大師こと真盛上人（1443-1459）が夢で蛭江神社の神に霊薬を授けられたため奉納したと言われるもので、真盛上人自作と言われています。

毘沙門堂は蛭江大明神地蔵菩薩守護脇侍の 12 神将立像が、観音堂は湖東 33 霊場第 30 番札所・天台宗西源寺として聖観音菩薩立像が安置されています。また毘沙門堂には後述の朽ち果てた数体の仏像・菩薩像がありましたが、今は守山市文化財に指定され、滋賀県立琵琶湖文化館に保管されています。



毘沙門堂十二神将立像

また、境内の大きな池は「御蛭様池」といい、洪水で流れそうになったご神体を守ったタニシを保護するために掘られた池といわれています。

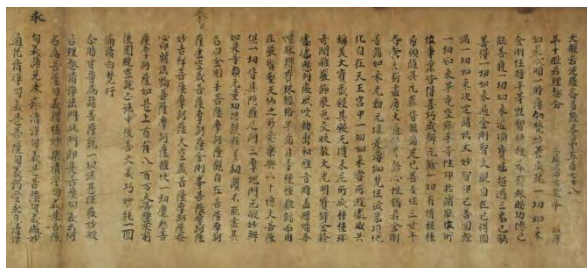
野洲川の豊富な伏流水からの湧水であったが、野洲川改修によって水が枯れてしまいました。



御蛭様池

蜷江神社の文化財

○紙本墨書大般若経理趣分一卷（市指定文化財） および大般若経二百巻



大般若経理趣分（巻頭）



大般若経200巻

「紙本墨書大般若経理趣分」は、正応五年（1292）に広江僧長楽居士法光房が、写したと伝えられるもので、天地幅 26.2 c m、全5紙からなっています。（写真提供：滋賀県立琵琶湖文化館）

毎年7月10日前後の日曜日に、僧侶による「大般若経」（200巻）の転読が神前で行われています。古い伝統を受け継ぎ、神仏習合の形式を偲ばせる行事です。



僧侶による転読

○鰐口（鎌倉時代）（県指定文化財）（写真提供：滋賀県立琵琶湖文化館）

地蔵院にかけられていた直径 30 c mを超える大型、肩厚の広い鰐口です。銘帯に「吉祥寺江州播磨田」「永仁七年亥巳二月廿日」（1299）と刻まれていることから、鎌倉時代の鰐口で、吉祥寺から伝わったものであることがわかります。



○木造天部形立像（奈良時代）市指定文化財（写真提供：滋賀県立琵琶湖文化館）

毘沙門堂で発見された数体の仏像・菩薩像のひとつです。体の一部が腐朽しているが、作り方や材料の特徴から奈良時代後期に作られた吉祥天と思われる天部形立像であると推測されています。



○その他の文化財（市指定文化財）

- 木造女神座像（平安時代）
- 木造狛犬一對2軀（鎌倉時代）
- 木造狛犬（鎌倉時代）
- 木造化仏（平安時代）

水災記念碑

古来、野洲川は「近江太郎」とよばれた暴れ川でした。周辺に住む人々は、度重なる洪水氾濫の為、多大な被害を受け続けてきました。特にここ笠原付近は、今は旧川となった南流への分岐点にあたり、洪水時の流れが最も激しい所のひとつでした。そのため幾度となく堤防決壊を繰り返したという古くからの記録が残されています。

なかでも、大正2年（1913）10月3日 未明の出水は約180mもの堤防を決壊させ、死者32名、流出家屋25戸、浸水面積約300haという未曾有の被害をもたらしました。

その後も、人と川の戦いが続きましたが昭和28年9月の13号台風による大災害が契機となり、野洲川の改修が始まりました。昭和46年に南流と北流の間に放水路を建設する工事が開始され、昭和54年には新しい野洲川が誕生し現在の姿になりました。

この「水災記念碑」は大正2年に堤防が決壊した場所に建てられたもので、過去の災害を忘れないように、そして過去の経験を活かし二度と悲惨な歴史を繰り返さないようにとの願いがこめられたものです。



城野曹長の碑

順教寺の境内に城野曹長の碑があります。

大正2年10月3日、笠原の堤防が決壊し濁流が全域を襲いました。当時、陸軍幼年学校をやめ、郡役所の役人として働いていた城野清三郎さんは、老いた母を背負い木綿袋を提げて順教寺へ避難しようとなりました。しかし妻の叫び声を聞いて引き返し、妻を探し求めるうちに帰らぬ人となりました。夜が明けて発見されたときは、肩から下げた木綿袋を固く握りしめたままでした。彼は、この笠原が昔から水害との闘いの地であったことを忘れずに、いつも災害に備えていたのです。

この話は人々に深い感銘を与えました。軍はこれを退役軍人の模範とし、この木綿袋を「奉公袋」として採用の上、在郷軍人に重要品を常備させました。また一般家庭でも常備袋として普及し、今に伝えられています。

（ふるさと守山 デジタル資料集より）



川辺の集団移転記念碑

野洲川の改修工事は、昭和46年（1971）に着工、昭和54年（1979）に完成して、新放水路に通水が始まりました。

水害をなくすことは流域住民の悲願であり、この放水路の建設によって野洲川の水害は過去のものになりつつあります。

一方、これにより、かつて北流と南流の中州地帯にあり、南流を隔てて笠原と相隣する新庄の川辺地区の全戸住民が住み慣れた地を離れなければならなかったことを忘れることはできません。

大部分の住民やお寺、神社、田畑を含め、笠原地先に集団移転し、新たな「川辺自治会」を設けました。

この記念碑は、笠原町川辺に野洲川改修事業が地域の人々の幸せに寄与することを願って、昭和48年12月に守山市笠原町801-6川辺公民館敷地内に建てられました。



近江妙蓮



大日堂



近江妙蓮

近江妙蓮

昭和 40 年 3 月 26 日 滋賀県天然記念物 指定

昭和 50 年 8 月 1 日 守山市の花に指定

近江妙蓮は、600 年前から川田町田中の大日池に生育している珍しい蓮の地方名です。明治後期から昭和 30 年頃まで開花しない時期がありましたが、大賀博士や地元保存会の皆さんの尽力で復活したという経緯があります。

妙蓮は、葉や茎は常蓮（普通のアス）と大きな違いはないが、開花すると驚くほど違ってきます。妙蓮の花弁の数はつぼみの時は 2 千枚ほどですが、開花すると次第にその数が増えて 5～6 千枚にも達します。

常蓮の花は 4 日ほどで花びらを散らせるが、妙蓮は花びらの数が増えるため 2～3 週間ほど咲き続け数千枚の花弁を残したまま枯れるという珍しい蓮の花です。



妙蓮のつぼみ



開花直前

由来 (中川原正美著 「近江妙蓮」 600 年の歴史に育まれた蓮の記念誌より)

平安時代に慈覚大師(円仁・794～864)が唐より持ち帰ったといわれているが、妙蓮池に咲く近江妙蓮は、室町時代、近江守護職の佐々木六角満高の命を受けた田中左衛門尉頼久が屋敷の西側にある氏神八幡神社の庭に池を掘って蓮根を植えたのが始まりと推定されています。将軍足利義満公に献上され(1604)その時蓮池の守り本尊として大日堂が建立されました。その後も皇室や歴代の徳川将軍にも献上されました。

近江妙蓮公園

マップ参照番号
11



茶室からの眺め

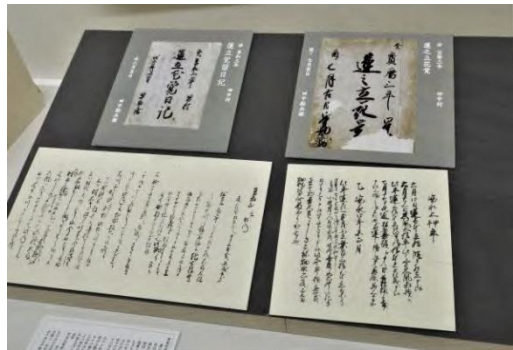


資料館

平成9年3月、大日池に隣接して近江妙蓮公園が設置され、新たに瑞蓮池を堀って蓮根を移植、資料館、観蓮棟、など約2,500㎡が整備されました。資料館には、田中家に伝わる妙蓮に関わる古文書や蓮の成長写真などが展示されています。また併設されている茶室は、茶道、華道などで利用することができます。



展示場



田中家に残る古文書

田中家の古文書

「江源日記」 近江守護職佐々木六角家の歴史を記録した16冊の写本で、この中に妙蓮の花が歴史上はじめて咲いたことや、将軍足利義満公に献上したことなどの記載があります。(1406)

「妙蓮日記」 江戸時代160年間にわたって(1657～1815)、田中家の歴代当主が書き続けた日記で、年代順に「蓮花立覚留日記」、「蓮之立花覚」、「蓮立花覚日記」があります。

内容は、妙蓮の咲いた数や畑の作柄、さらに天候のこと等が記されており、当時の農業の様子や野洲川の洪水の状況な

ど貴重な情報を知ることができます。

喜多の淡瀬桜

淡瀬桜

喜多天神社隣の児童公園に、「野洲川の災害から地域を守ってきた」と言われ大切にされてきた、樹齢数百年の『淡瀬桜』がありました。淡瀬桜は、つぼみの時は薄いピンク、満開の時は白色、散り際は薄い墨色へと変化する珍しい種類の桜です。

喜多の淡瀬桜は、衰弱が激しいため、岐阜県根尾村(現本巣市)淡瀬桜(樹齢 1500 年・国の天然記念物)保存会の指導を受けるとともに、樹木医の診断治療を受け元気を取り戻していましたが、残念なことに、平成 29 年 10 月の 21 号台風で倒れてしまいました。

地元自治会では、倒れた傍に育ってしてくれる『二世の淡瀬桜』の生育を見守っています。また、古木の傍に古木の幹を利用した『モニュメント建立』を計画されています。

(まるごと活性化プラン)



喜多の淡瀬桜（平成 29 年春撮影）

淡瀬公園

また、川田大橋のたもとの旧堤防のあった三角窪地に、根尾村淡瀬桜保存会より樹齢 1500 年の淡瀬桜の実生苗木 6 本の贈呈を受け平成 7 年 10 月「淡瀬公園」として整備されています。



川田の一本松

一本松史跡公園

JNC ファイバーズ（株）守山工場裏側の野洲川堤防に、小高く盛られた「一本松史跡公園」があります。地元の皆さんによってよく手入れされ、春の桜、秋の紅葉は見事で四季を通してオアシス的な存在です。



一本松史跡公園

一本松の由来

かつて野洲川旧堤防左岸に、川田の人々から神木として敬われた「一本松」と「大神宮」と呼ばれる祠がありました。その位置は、今の史跡公園の場所から野洲川河川敷へ約 60m 入った所で、ちょうど旧野洲川の北流と南流が分岐するあたりにありました。川幅が急に狭まり、川の流れのあたり場となるため、大水の度に破堤し、村人はその都度堤防の修復、強化を繰り返しましたがなかなか固定できませんでした。そこで村人は松を植え、大神宮を祀って鎮水を願ったと言われています。



切り倒される前の一本松

一本松の下の大神宮の社は、「伊勢講中」の旅の安全祈願や、参宮後の帰郷報告、村の安全、五穀豊穰を祈願するなどの儀式や祭典の場として重要な役割を果たしていました。

このように一本松は重要な神木であるがゆえに一層大切にされました。回りは頑丈に固められ、上へ上へと土が盛られて、根が大きくしっかりと張り、水害にも耐えていったものと思われます。松の木は、樹高 20m、胸高幹周 3.5m 枝張 10m に達する樹齢約 300 年の大木でしたが、野洲川改修により、昭和 50 年 8 月伐採されました。

その後、かつて一本松があった場所に近い旧堤防に桜が植えられ、現在は一本松史跡公園として地元が管理しています。

大神宮の遷宮

大神宮は、一本松伐採後昭和 49 年 12 月天神社本殿北側に遷宮され、昭和 51 年正月神宮庁より樹齢 3~4 年の松、杉各 1 本を代替わり神木として拝受し、大神宮の北側に植樹しました。

また、伐採された松は、衝立にして川田公民館、天神社社務所、市立埋蔵文化センターに保存され後世に残されています。



遷宮された大神宮



一本松移転記念碑

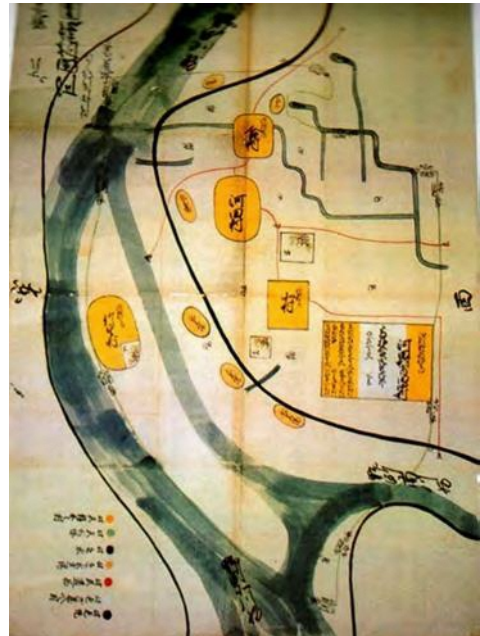


一本松で作られた衝立

合村伝説と石仏

悲劇の村「合村」

今から約 340 年前、延宝 5 年（1677）の「江州野洲郡ノ内川田村絵地図」に、川田村の枝村として「合村」と書かれた小さな村があります。一本松と川田集落のほぼ中間にあつて、しばしば川切れと洪水に悩まされていた合村は、江戸時代に一本松付近の破堤により全村流出滅亡したという悲劇の村として伝えられています。合村は戸数が少なく農業をしていない人が、他の村から隔絶し、私財に富んで贅沢な生活をしていたといわれています。身分や姓名も不明で（陰陽師という説もある）川田町にはその子孫は一戸もないという不思議な村として伝えられています。合の元、合の西、合の北、合の南など、今では用いられることが少なくなっている小字名に、その名残があります。



合村の記載がある絵地図（1677）

昭和 2 年に行われた耕地整理で、合村跡と推定される場所（現在 JNC ファイバーズ守山工場付近）からたくさんの石仏や墓碑が、発見されました。

合村跡地から見つかった石地蔵や墓碑は、近くの十王堂に集められ祀られています。

また、昭和 61 年の川田遺跡の発掘調査で合村の一部と思われる江戸時代の堀跡などが発見され話題になりました。



発掘された石仏



十王堂

なお、十王堂は平成 29 年 11 月、宅地開発のため撤去されましたが、石仏群は史跡として管理され残されています。

若宮神社の神事

若宮神社

守山市中町 112 番地

祭神 市杵嶋姫命

伝 天長 6 年創始、嘉永元年洪水により被災、旧村社



餅つき神事 (5月4日)

五穀豊穰、家内安全を祈願するとともに、地域住民の相互扶助・連帯意識の向上を目指した中町古来の伝統文化です。

一時中断されていましたが、戦後「餅つき保存会」によって形を変えて復活しました。若宮神社境内で神輿の宵宮渡しの後に老若男女が集い、豊作と人づくりを願って「餅つき唄」を唄って餅つきを行います。

お粥神事

毎年、成人の日午前 0 時に、豊作と家内安全を祈願して子供たちが「粥」をお供えします。翌早朝町民が一堂に会し「粥」を食べ新年を祝う神事です。



餅つき神事モニュメント

児島城址（小島天満宮）

32

鎮座地 滋賀県守山市小島町 1571 番地
 祭神 菅原道真公
 境内社 八幡宮、皇大神宮、熊野神社
 祭礼日 4月4日 5月5日



小島天満宮は、廻りを土塁の跡らしき堤で囲われており、城跡（児島城址）であったといわれています。

社殿によれば、嘉歴元年（1326）児島高德が社殿を造営し、境内東南隅に池を掘り齋戒沐浴して、武運長久を祈願したと記されています。

池の西方に高德衣掛けの松といわれている大樹があり、また本殿の前と後ろに元亀元年（1570）子孫重範手植えの杉と伝えられる空を突く杉の神木を始め、多くの大木が昭和 39 年（1964）頃まであり、古い歴史を物語るにふさわしい荘厳な神域でした。



今も拝殿横に高さ 9m、根回り 92cm のツガの木があります。

ツガは天然林が伐採されて人の手が入ると急激に減少する木で、今では大変貴重な木となっています。材にはいろいろな用途がありその樹皮からとったタンニンで漁網を染めていました。



阿比留の川戸

阿比留は河西の最大の水源であった丸坪の池から湧き出た川の最上流に位置する集落で、どの家にも均等に水が巡るように水路が敷かれています。

この水路から、家屋内に水を引き込んだ水くみ場を「かわと」と呼んでいます。

昔「かわと」は、炊事、洗濯、風呂などあらゆる生活用水に利用され、日常生活に欠くことのできない場所でした。

“一度使った水は畑にまくなどして、決して川は汚してはいけない”

“みんなの共同の場所を大切にしたい”という、住民の強い思いのこもった場所でもありました。

丸坪の池が消滅した現在は、近くの工場から豊富な水が供給されています。水路は鯉や小魚が泳ぎ、水辺には花が咲き、水車が回る憩いの場所になっており、「かわと」のここは今もなお住民に引き継がれています。



阿比留の水路



丸坪の碑

現在旭化成守山製造所のある一帯は、かつて野洲川の二重堤防で「六兵衛山」というキツネやタヌキが息していたと言われる鬱蒼とした森でした。その中に周囲 75m余りの丸坪の池と呼ばれる湧水池がありました。



昔の丸坪の池



六兵衛山上空（昭和 29 年）

湧き出した豊富な水は阿比留、小島の里中の「かわと」として人々の生活用水に利用され、法竜川から赤野井湾に注ぎ、流域の水田を潤していました。

池は昭和 31 年同社の建設時に撤去されましたが、建設後はくみ上げられた地下水が放流されて、今なお当時と変わらぬ豊富な河西の水源となっています。

現在同製造所内の池跡に記念の碑が建てられています。



旭化成守山製造所内の丸坪の碑

また、同製造所では、こうした歴史的背景から、地域性を考慮した生態系の再生(水源地・生物の復活)を目指した生物多様性保全活動を推進しており、河西学区まると活性化と連携したイベントなどを実施しています。

- ① 同製造所内におけるビオトープ、ハリヨの保護・育成
- ② 河西まると活性化と連携したトンボの生息状況調査



ハリヨ保全池



トンボ生息状況調査(鳩の森公園)

鳩の森公園

鳩の森公園は、昭和 56 年 4 月守山市都市公園条例に基づき、河西ニュータウン住宅内に設置された約 2 万 2000 m²の広さを持つ自然豊かな公園です。

ここは、かつて「六兵衛山」の一部でした。その大部分は旭化成守山製造所の用地となっていますが、野洲川の伏流水が自噴するいくつかの池がありました。公園内の宮川池と蛍池もかつての湧水池の一つです。



宮川池(江西湧)



蛍池（矢島湧）

蛍池は矢島湧、宮川池は江西湧と呼ばれ、それぞれ平久曾川および江西川をへて川下の矢島、今市・荒見の田の灌漑に用いられていました。農業用水の確保は住民にとっては命の源であり、流域の集落の間で水利慣行に基づいた細かい取り決めがなされていました。今日でもその名残をとどめている「湧のぼり」と呼ばれる川ざらえは、水の流れを確保するため毎年決められた日に行われていた重要な行事です。またその「湧のぼり」をめぐる、集落間で壮絶な水争いが起こったという記録も残されています。

今ではどちらの池からも、ポンプでくみ上げられた地下水が園内を流れて、従来どおり平久曾川、江西川に放流されており、かつての湧水池を偲ばせる風情が保たれています。また今はその役目を終えて撤去されましたが、「市立ホタル研究所」が設置され、ゲンジボタルの人工増殖の研究により守山ほたるの復活に貢献しました。

四季折々に花が咲く森や小川を散策したり、カワセミ、コゲラなど数多く生息する野鳥観察にカメラを手にした愛好家も多く訪れています。グラウンドは少年野球や高齢者のグラウンドゴルフでにぎわうなど地域住民の憩いの場所となっています。



早咲きの修善寺寒桜

播磨田湯の樋

播磨田は、野洲川の古流である江西川の自然堤防上に開墾された土地です。川が運んできた泥砂土により土地が肥沃で、播磨田米として評判の米が収穫されました。しかし一方では、土地の保水性がないため、農業用水の確保に苦労の多い地域でした。そのため住民は小字単位で堀池を設け湧水を樋でくみ上げましたが、早魃になると水不足は深刻で水をめぐむ争いが絶えなかったようです。特に元禄 6 年（1693）矢島と播磨田の間で、現在の鳩の森公園内の池（螢池）から湧き出た平久曾川の水をめぐって壮絶な水争いがあったことが記録に残っています。



現在の播磨田湯

丁度その頃、播磨田の庄屋を務めた田中幸右衛門が元禄 5 年（1692）から享保 4 年（1719）の 27 年間の歳月をかけ、安定した農業用水を確保するため野洲川の川床に籠樋を設置し、石樋でトンネルを作り、本堤防を潜り抜けた水路を完成させました。

幸右衛門は 100 日間、毎日毎日野洲川の善岸川原で地面に耳を当て地下の水脈を探り続け、ついに水源を見つけたと言い伝えられています。

水路は三の坪を通り播磨田の田 900 反を潤し、その後はいかなる早魃の年にも水の心配がなくなったとのことでした。

この川底に埋設された籠樋は、30～40 年ごとに播磨田住民の手で更新されてきましたが、昭和 46 年（1971）の野洲川改修工事の際に従来の播磨田湯は撤去されました。

その後は元の場所にポンプを設置し、播磨田自治会の管理のもとで伏流水をくみ上げ、今なお本堤防下を通り播磨田に一定量の水を安定して送っています。

田中幸右衛門顕彰碑

明治 34 年（1901）地元有志の人たちが、田中幸右衛門の功績をたたえるために播磨田大神宮境内に顕彰碑を建てました。



大神宮境内の田中幸右衛門顕彰碑

水止め石

マップ参照番号

40&53

堤防の決壊による洪水に備えて、村の最上部に小堤防を築き横切る道路には水止め石一対を設けました。水止め石は中央に溝を彫った石柱を道の両端に打ち込み、6尺3寸(約195センチ)の戸板(雨戸)がはめられるようになっています。大水が出たときはいち早く止めることが大切で、どこの家にもある戸板を使用するようにしました。そしてその戸板の前後に土嚢を積んで固定しました。完全な形ではありませんが、播磨田と荒見の道路わきにその跡が残っており、当時の人々の苦労の様子がかがえます。

荒見の水止め石

江西川の氾濫に備えて、旧佐々木街道にまたがって設けられており、洪水時には道路の両サイドにある水止め石に点線のように戸板をはめ込んで浸水を防ぎました。



荒見の水止め石

播磨田の水止め石



播磨田大神宮付近の民家の生垣に残された水止め石

高田信岳と顕彰碑

マップ参照番号

42

高田信岳（西蓮寺 20 世（1828～1901））

明治元年（1868）に政府は神道と仏教を分離する神仏分離令を出しました。この令による神社と寺院の争で、神社の社殿にある仏像、仏具、経典などが焼き捨てられるといった廃仏毀釈運動が起こりました。

これに危機感を覚えた西蓮寺住職高田信岳は、明治 8 年（1875）真宗木辺派賢慈宗主に随行し明治政府に信教の自由擁護と仏法の護持を訴え続けました。

その結果、神道推進政策の一部が廃止され、信教の自由が保障されるようになりました。

その後も信岳は勉学に励むとともに「ごえんさん」として活躍し、明治 34 年（1901）73 歳で他界したとき、近郷の人々は信岳を偲んで西蓮寺境内本堂横の庭園に顕彰碑を建て功績を称えました。



高田信岳顕彰碑

西蓮寺板碑

マップ参照番号

43

高田信岳顕彰碑の横に西蓮寺境内から出土し移設された板碑があります。

幅 28cm 地上高 77cm 花崗岩で作られ、月輪内に阿弥陀一尊種子（梵字）が彫刻されています。銘はないが、形状と種子等の表現から見て鎌倉時代後期のものと考えられています。

本板碑は、平成 12 年 5 月 12 日、市指定文化財（建造物）に指定されています。



西蓮寺板碑

板碑とは

方柱状の石材の頂部を山形に刻み、肩部に二段の切り込みと、前方に突出した額部を作り、以下を身部とした石造塔婆の一種である。身部の上半の月輪に尊像や種子を配することが多い。種子は、仏や菩薩等を表示する梵字である。

杉本家屋敷

杉本家は、かつて荒見一帯を治めた大庄屋です。

江戸時代後期の作庭といわれる枯山水の庭園があります。

茅葺の大きな表門をくぐると母屋の入り口までの広場に、形のいい黒松や刈り込まれたさつきなどの植わっている前庭があり、周りは白壁の土塀に囲まれゆったりとおおらかな空間を広がらせています。



また杉本家庭園内に、江西川の氾濫から屋敷を守るために設けられた水止め石が残されています。



引用・参考文献一覧

- 「守山市誌 歴史編、地理編、考古編」 (守山市)
「播磨田町誌」(播磨田自治会)
「ふるさとの伝承」 (川田自治会)
「守山市学区別歴史街道マップ」(市制 30 周年 守山市教育委員会)
「近江妙蓮」600 年の歴史に育まれた蓮の記念誌 (中川原正美著)
「野洲川と共に生きる人びと」 (奈良大学紀要 第 31 号 高橋春成)
「寺院要覧」(守山仏教会)
「滋賀県神社誌」(滋賀県神社庁)

お世話になった方々

河西学区自治会 自治会長並びに識者の皆様
杉本家当主
八大神社 村城宮司
各寺住職
中川原正美先生

あとがき

本冊子の編集に際しましては、学区内の多くの皆様方より貴重な資料や情報、また懇切なご助言を賜りましたことに対して改めて感謝申し上げます。

なお、折角頂戴した資料や情報も紙面の都合上掲載が叶わなかったものや、また編集、執筆の才至らず適切かつ十分な表現ができていない部分も数多くあろうかと存じますがご容赦頂きたいと存じます。

平成30年 9 月

編 集：河西学区まるごと活性化
河西の「身近な魅力」情報発信プロジェクト

連絡先：河西会館

電 話 077-583-2792

メール kawanishikaikan@city.moriyama.lg.jp



The Garden City